

江戸時代後期、天保の大飢饉がはじまろうとしていた 1832 年に『雪華図説』という本が出版された。記したのは古河藩藩主、土井利位。この本には、職務の傍ら 20 数年間におよぶ雪の結晶の顕微鏡観察によって得られた 14 か条の雪の効能と 86 種の雪の結晶図が納められた。私家版なので出版数も少なかったが、掲載図版をもとに雪華模様の衣装が流行した。そのため、土井利位は「雪の殿様」の愛称をいただくこととなった。

それから約 100 年後の 1931 年、アメリカで『Snow Crystals (雪の結晶)』という世界で初めての雪の結晶写真集が出版された。撮影したのは殿様ならぬベントレーという一介の農夫であり、生涯 50 年間 5381 枚におよぶ写真撮影の中から 2453 枚を選び、当時のアメリカ気象学会会長ハンフリースとの共著という形で出版された。ベントレーの本はただの写真集で、科学的な記述に乏しいところから専門家からの評判は必ずしもよくはなかったが、逆に言えば、ひたすら写真に徹したことで多くの人々を魅了したのも事実であった。ベントレーは「雪の結晶は美の奇跡である」という言葉を残した。

ベントレーの出版から 2 年後の 1932 年、中谷宇吉郎という科学者が北海道大学に赴任して、十勝岳の麓に観測小屋を建てて天然雪の結晶観測をはじめた。中谷は雪の結晶写真を 3000 枚以上撮っては分類・研究をくり返すなかで、世界で初めて人工の雪の結晶を作ることに成功した。そして「ナカヤ・ダイアグラム」をあらわしで世界中に知れ渡ることになった。中谷は「雪の結晶は、天から送られた手紙である」という言葉を残した。中谷は雪を研究する上で土井利位の『雪華図説』も当然知っていて、利位の住居下総の古河のような所では、厳寒の時でも夜か夜明けでないと観測が困難であろうこと、忠実な観測を長年月にわたって続けることはかなりの労苦を伴った仕事であろうこととして、小さいながらも一城の主の趣味的仕事としては正に感嘆すべきものであると称えている。

下に溪斎英泉による浮世絵と蒔絵による印籠での雪華紋使用例を載せる。和風と雪華の相性のよさに驚く。今日では茨城県古河市にある古河歴史博物館で土井利位ゆかりの品々を観ることができる。また売店では雪華紋グッズも扱われており、私はハンカチを購入して大事に使っている。



江戸の松名木尽 押上妙見の松
(江戸後期・溪斎英泉・古河歴史博物館所蔵)



〈国指定重要文化財〉雪華文蒔絵印籠
(江戸後期・原羊遊齋制作・鷹見家歴史資料)